

## イランに恋する

古賀大幹

「百聞は一見にしかず」、意味はわかっていても、なかなか実践出来ない言葉のひとつである。また、一度悪い方向に振れてしまったイメージを良いイメージに変えるのは非常に難しい。しかし「悪い」↓「良い」へのイメージ転換は、感じる本人にとって劇的である。この転換から恋に落ちるといえるのは、ラブコメディにはよくある手法だ。

二〇一三年一月十九日、私は初めてイランに行った。期待と不安、特に三日前の一月一六日はアルジェリア人質事件があったこともあり、今振り返ると中東への出張は少々不安が大きかったように思う。経済制裁が強まり、アメリカから「悪の枢軸」とまでいわれたイランへの出張に、周りの人間も「イランに行くの!？」大丈夫?」と私の不安を煽った。

空港に着くと、ツアーの看板や紙に名前を書いて出待する人々の光景が広がる。イランであれば日本であれ、その光景は変わらない。「私は一体何を恐れていたのだろうか」ちつぽけな己をばかばかしく思った。

空港からテヘラン市内へ一時間程度車を走らせる。荒れ地に舗装された高速道路が一本通っていることに、少々感動を覚えた。そういえば出張中、舗装されていない道を走ることとはほとんどなかった。

事務所に着き、明日の講演会の準備をして、食事をするために街へ下った。カフェで

一〇万リアル(約二九〇円)のサンドウィッチと六万リアル(約一七〇円)のコーヒーを頼んだ。イランの食事は普通に頼んでも日本の大盛り程度、名前通り大食漢な私でも満足できるボリュームだ。生ものも安心して食べられるし、水道水もそのまま飲める。経済制裁を受けながら、見た目には物不足に悩む様子は全くない。ホームレスや物乞いもほとんど見ない。イランの力強さを感じた。

昼食後、講演会で使用する物品購入のために、バスに乗って移動した。テヘラン市内の一部に地下鉄は通っているものの、基本的にはバスかタクシー、自家用車が交通手段であり、ガソリンへの補助制度もあって、安価に利用することができる。特にバスの一回の運賃は二二五〇リアル(約六円程度)と非常に安価で、外国人でも安全に利用できる。バスの構造は日本と同じく前方と真ん中に乗降口があり、運賃は前方でのみ回収している。しかし日本のように必ず前から乗る、もしくは降りるといった秩序はない。二つの乗降口のどちらからも乗り込み、降りていく。こんなことでちゃんと運賃を回収できるのか、そんな不安からバス内外を観察していると、後ろから降りた人も律儀に前に回ってお金を支払っていた。

滞在中のイランは不況期で、私がイランを訪問する一年前は一US\$当たり一万一〇〇〇リアルだったが、訪問中は一US\$当たり三万三〇〇〇リアル。リアルは三分の一以下に暴落する一方、物価も高騰していた。失業率も一五%程度、日本より遥かに高い。そのような不況下にありながらも彼らは律儀に小金を支払い、そして去って行く。「美德」とはまさにこのことであろう。

商業施設に入ると世界では主流の韓国製品よりも日本、特にSONY製品を扱う店が多くあった。

また驚くことにアメリカのApple製品も多くの店で取り扱われていた。考えてみれば確かに、町中でiPhone特有のあの電子音をよく耳にした気がする。本音と建て前ではないが、流行の商品や新しい技術に対する好奇心に規制はかからないようだ。イランはイスラム教シーア派を国教としているが、他の宗教には非常に寛容である。市内には国内最大のアルメニア教会があるし、教会内は治外法権のようで、むしろ彼らがムスリムを排除して、ヘジャープのない世界で祈りを捧げている。

日本では読み取れなかった、豊かであるこそその誠実と寛容。私はイランに恋をした。たった一日の間で急激に「悪い」↓「良い」へのイメージ転換が起こったために、恋に落ちざるを得なかった。もちろんビジネスの世界はそう甘くない。取引をすれば、華僑も恐れをなしたペルシア商人気質が全面に出てくるというし、制裁のおかげで送金が出来ない。大量の古い車が粗悪なガソリンで走行し、渋滞を引き起こすので、大気汚染がすさまじい。ソフトウェアは違法コピーが多く、模倣品対策も欠かせないだろう。しかし一度恋に落ちれば、「恋は盲目」小さなことには目を捕らわれなくなる。

「恋愛は相思相愛、私ばかり恋心を募らせてどうなのか。」そのような質問にはこうお答えしよう。「ジャポニ、グッド!」と道端で声をかけられることはしばしば、日本人だからということではサーブしてくれることもある。そう、イランは大親日国家なのだ。

イラン人の父親と日本人の母親の間に生まれた、私と同級生のダルビッシュ有。世界の舞台上で活躍する彼に、この恋の行く末を感じるの、少々盲目過ぎるだろうか。

